

国立国語研究所学術情報リポジトリ

On Phonemes of the Dialect of Yonaguni-zima in the Ryûkyûs

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴田, 武, SIBATA, Takesi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001706

琉球・与那国島方言の音韻

柴 田 武

1 はじめに

1.1 与那国島

与那国島ヨナグニは琉球の八重山群島に属し、琉球の島々のうち最も西にあって、台湾に一番近い。ほぼ東経 122°56' ないし 123°03', 北緯 24°26' ないし 24°28' の方形のなかに位置する。島の周囲約 7 キロ、島内に四つの集落がある。総戸数 550, 総人口 6000 といわれる。

ここで扱う方言は、この四つの集落のうち最も大きい(戸数 300) 祖内ソナイ(祖納とも書く)の方言である。祖内は島では /mura/ という。なお、与那国島はこの方言でいうと、/duna'Ncqima/ である。四つの集落の方言は、イントネーションを除いては、ほとんど差がないという。

いままで、島の民俗など一般的状況については、大正末期の報告(本山桂川「與那國圖誌」『爐邊叢書』郷土研究社・大正14)があるが、言語については、宮良当杜「八重山語彙」東洋文庫・昭5 が断片的にうかがい知らせるだけであった。

1.2 被調査者

被調査者はいま東京在住の外間守之 /hukamanu muriQki/ 氏である。昭和12年(1937)祖内で生まれた。両親も祖内の生えぬき。守之氏は15歳から18歳まで石垣島(与那国島方言で /dama/ という)の高等学校で学び、18歳から21歳の現在まで東京の大学(亜細亜大学商学部)で勉学中の学生である。

2 音韻体系

2.1 音 素

30箇の音素が分析され、次のように分類することができる。

子音音素 /p, t, c, k, pq, tq, cq, kq, b, d, z, g, m, n, r, ŋ, s, h, ʔ, ' , Q/

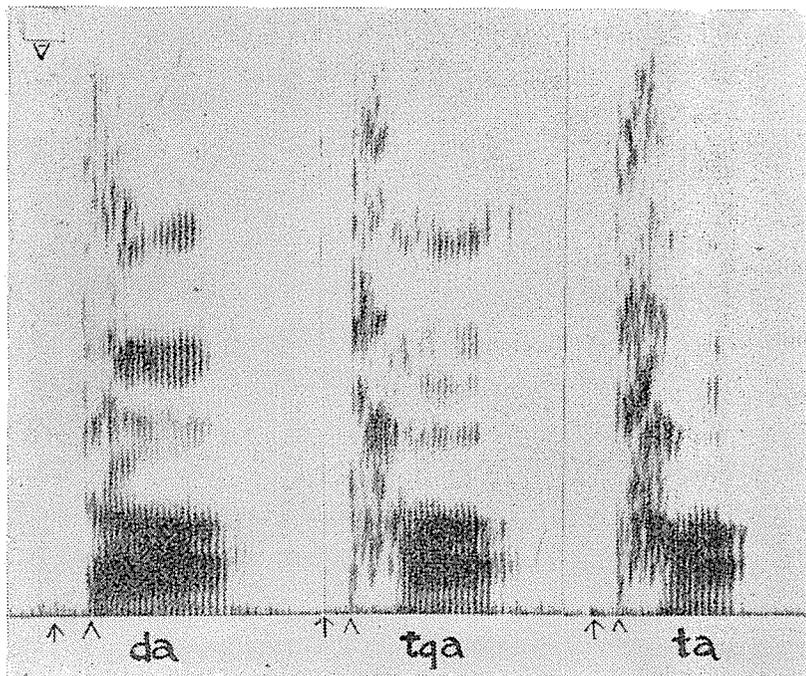
半母音音素 /w, j/

母音音素 /i, u, e, o, a, N, R/

2.1.1 子音音素

まず注意すべきものは /pq, tq, cq, kq/ である⁽¹⁾。これらは、/b, d, z, g/ および /p, t, c, k/ と次のような音声の特徴について対立する。

	b, d...	pq, tq...	p, t...
無声か	-	+	+
無気か	+	+	-
喉頭化か	-	+	-



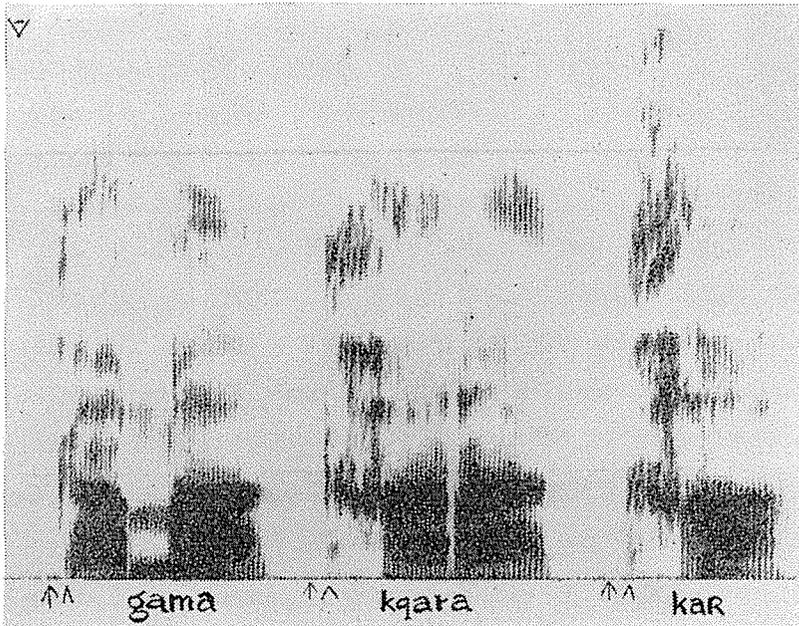
第1図

〔1〕 服部四郎氏は奄美大島大和浜方言の「声門閉鎖を伴う無声無気音」を / $\pi, \tau, \text{ll}, \text{q}$, c , c ?/ で（『世界言語概説下巻』中の「琉球語」。p. 320）、琉球与那嶺方言の「喉頭化無気音」を / $\pi, \tau, \text{c}, \text{c}$, c ?/ で表わしておられる（『沖縄方言の言語年代学的研究』『民族学研究』XIX-2）。ここでは、印刷とタイプライティングの便宜などを考えて、2字母で1音素を表わすことにした。

/pq, tq…/ は無声・無気・喉頭化音である。第1図のソナグラムは /da/ 「家」、/tqa/ 「舌」、/ta/ 「田」を分析したものであるが、まず、/da/ が他の二つとかなり異なることがわかる。他の二つは互によく似ているが、よく見ると二つの点で異なることに気づく。第一に、[t] の破裂のあと [a] に移るまでの部分を比べると、/t/ の方が著しい縦じまを見せている。これは、/t/ に伴う息が /tq/ よりも強いことに対応すると見られる。耳で聞いて、/t/ を有気、/tq/ を無気とするのはこのことと関係がある。

異なる第二の点は、spike といわれる部分、つまり、^で示した縦の線を比べると、/tq/ の方が /t/ よりもややはっきり出ている。これは喉頭の緊張が /t/ よりも強いことに対応すると見られる。耳で聞いて、これを喉頭化・非喉頭化の対立とすることと関係がある。

第2図は /gama/ 「小さな洞穴」、/kqara/ 「瓦」、/kaR/ 「井戸」の3語を分析したソナグラムである。いま、問題なのは語頭の /g, kq, k/ で、特に /kq/ と /k/ との違いである。第2図で見ると、この場合も、破裂のあと母音



第2図

が始まるまでの部分を比べると、/k/の方が縦じまが著しい。一方、spikeは/kq/の方がはっきり出ている。/tq/と/t/との違いに平行的である。

実際に /pq, tq…/ を耳で聞いた感じでは、わたしの知っている範囲では朝鮮語の濃音に一番近い。朝鮮語の濃音⁽²⁾の濃音⁽²⁾は喉頭は緊張していないが、無気の喉頭化音である点は似ている。

東京方言の /ta/「田」と比べると、これは与那国島方言の /ta/「田」にきわめて近い。東京方言の話し手にとっては /tqa/「舌」はかなり異様に聞こえる。/pq/, /cq/, /kq/ についても同様である。

/b, d…/, /pq, tq…/, /p, t…/ の3系列の子音音素は、さきあげた三つの音声的特徴のどれか二つによって十分対立する。それでは、三つの音声的特徴のうち、3系列の子音音素を対立させるのにギリギリ必要なのはどれとどれか。まず、有声・無声は動かせない。/pq, tq…/ も /p, t…/ も有声になることは決してないのに対し、/b, d…/ は必ず有声である。すると、残る二つの特徴のうちどちらが必要な特徴かということになる。

第1図・第2図のソナグラムでも特徴は二つ出ているし、聞いたところでも決定的なことはいいいにくい。しかし、わたしの観察した限りでは喉頭化の方がいっそう重要な特徴と見られる。喉頭の緊張を欠く /pq, tq…/ は聞かれなかったのに対して、無気の /p, t…/ はしばしば聞かれたからである。この二つの系列の対立は決して中国語の無気・有気の対立ほどは著しくない。そこで、ここでは、/pq, tq…/ の系列を喉頭化子音音素と呼ぶことにする。

なお、鹿児島県大島郡天城村浅間（奄美德之島）の方言には、/p, t, c, k/ に対する /pq, tq, cq, kq/ のほかに、/m, n/ に対する /mq, nq/ が認められる（/maRsju/ 塩、/mqaR/ 馬；/naR/ 名、/nqaR/ 今）。/mq/の調音は、くちびるの閉鎖とともに声門も閉鎖し、くちびるの解放とともに声門の破裂音が聞かれるが、強い呼気は放出されない。このような調音からしても、/Cq/の系列を喉頭化子音音素として扱うのが妥当と考えられる。

(2) 朝鮮語の濃音については学者の間で説が一定していないが、そのうちに、一種の喉頭化音ではないか、という説がある。『世界言語概説下巻』中の「朝鮮語」（河野六郎氏執筆）。p. 369

さて、 /ʔ/ は声門閉鎖音に当り、 /h/ は有声喉頭摩擦音に当る。これらを /h/ (無声喉頭摩擦音をアロフォンとして含む) と比べると、

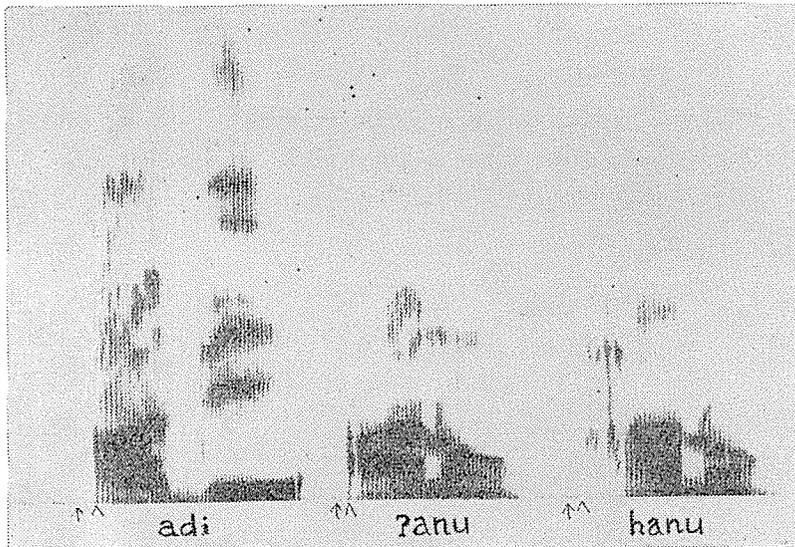
	,	ʔ	h
無声か	—	.	+
喉頭化か	—	+	—

のように、ほぼ /b : pq : p/, /d : tq : t/…… の対立に平行する。ほぼ、といったのは、 /ʔ/ に当る声門閉鎖音は有声・無声の対立について無関係であるからである (それを・で示した)。

第3図は、 /ʔ : ʔ : h/ の対立を見るために /ʔadi/ 「味」、 /ʔanu/ 「私」、 /hanu/ 「葉の」 の3語を分析したソナグラムである。いま、あとの二つを比べると、 /h/ の方が著しい摩擦的部分 (縦じま) を含み、一方、 /ʔ/ の方がはっきりした spike を見せている。この対立は、第1図における /tq : t/, 第2図における /kq : k/ それぞれの対立に平行する。

次に、 /g/ と /ŋ/ は次のように対立する。

/ʔuʔNnaga/ [ʔuŋ ʔnaga] 海 /minuŋa/ [mi ʔnuŋa] 女
/p, pq, b, m/ は、ぞんざいな発音では、両くちびるの閉鎖音であるが、て



第3図

いねいな発音では、下くちびる・上歯の閉鎖音である。

また、/c/ は [ts]~[tʃ], /z/ は [dz]~[dʒ]。

なお、/Q/ はいわゆる「つまる音」で、次に来る音素の調音と同じか、非常に近い。東京方言の「つまる音」に比べて、音の継続時間が短い。非成節的。

2.1.2 半母音音素

東京方言に比べて、/w/ のくちびるの調音は、かなりくちびるを円め、つき出したものである。しかし、摩擦を生ずるほど狭くはない。/j/ も東京方言に比べて閉じているが、福島県のある方言のように摩擦を生じない。半母音音素で始まる音節の末尾に /'N/ が来ると半母音が鼻音化する。

/'wa'N/ [wãã] 行かれた、いらっしゃった

/'ju'Ntqatqi/ [jũũt_hat_hi] ある種類の甘藷

しかし、この鼻音化は音韻論的に無意味である。たとえば、/'ware/ 「行かれよ」は [ware] であり、/'waranu'N/ 「行かない、いらっしゃらない」は [waranuN] であって、この場合、鼻音化音はあらわれない。

2.1.3 母音音素

/i/ は東京方言に比べて幾分開いている。/e/ は東京方言に比べて幾分閉じている。したがって、/i/ と /e/ とは聴覚印象からいって非常に近い。ただし、/e/ はいつも長母音としてしかあらわれない。

/u/ は東京方言に比べて幾分開いている。/o/ は東京方言に比べて幾分閉じている。したがって、/u/ と /o/ とは聴覚印象からいって非常に近い。ただし、/o/ はいつも長母音としてしかあらわれない。

/R/ はいわゆる「引き音」で、前に来る母音音素の調音と同じか、非常に近い。/Q/ と同じように、東京方言に比べて継続時間が短く、非成節的。

/Q/ や /R/ と違って /N/ は成節的で、/'N/ か /?N/ としてあらわれる。この点、母音音素と全く同じである。なお、後に来る子音音素の調音と同じか非常に近いという点は /Q/ と似ている。次に、/'N/ と /?N/ とが音韻論的に対立する例をあげておこう。

/'?Nma/ [ʔᵐma] どこ

/?Nda/ [ʔᵐda] あなた

/'Nma/ [ᵐma] 馬

/'Nna/ [ᵐna] 綱

/ʔŋja'ibu'N/ [ʔŋ'ŋaibuN] 濡れている /'kquʔN/ [ʔ'k_huʔN] ほこり
 /'Nkquti/ [ʔ'k_huti] 赤坊 /'kqu'N/ [ʔ'k_hu'N] 吹く

/muʔNnu/ [ʔ'muʔ_hnu] 雲の
 /mi'Nnu/ [ʔ'mi_hnu] 水の

2.2 シラビーム

以上30箇の音素をシラビーム（音韻論的に解釈された音節という意味。syl-labeme)⁽³⁾を組み立てる機能から分類し直して、これを連結可能な順に並べてみると、右のようになる。

「あたま」の部分には、/Q/を除く子音音素のすべてが含まれ、それ以外のものはない。「くび」の部分には半母音音素だけ。「むね」の部分には /R/ を除くすべての母音音素が含まれ、それ以外のものはない。「しり」の

あたま	くび	むね	しり
p t c k	w j	i u	R
pq tq cq kq		e o	Q
b d z g		a	
m n ŋ		N	
r			
s h			

部分には、子音音素・母音音素それぞれからはみ出た /R/ と /Q/ が含まれる。

この種のシラビーム構造図について、一般的に次のことがいえる。

1. 「あたま」「くび」「むね」「しり」⁽⁴⁾それぞれの部分の内部で、音素が互に連結することはない⁽⁵⁾。
2. 連結の順序は「あたま」→「くび」→「むね」（→「はら」）→「しり」である。
3. 「あたま」「むね」のどちらを欠くシラビームも存在しない。存在するシラビームは、AM, AKM, AMS, AKMS のいずれかである。ただし、A

(3) 拙稿「音声——その本質と機能」『国語教育のための国語講座 音声の理論と教育』朝倉書店・昭和33。

(4) 東京方言には、「むね」と「しり」との間に「はら」がある。(3)の拙稿参照。

(5) 「くび」の /w/ と /j/ とは、ときに連結する。[wja:] という音節が方言によってあるからである。たとえば、木曾開田村で [wja:ta] 「沸いた」、静岡県磐田郡水窪町で [kawja:] 「買えば」（『国語学 34』の馬瀬良雄氏、山口幸洋氏の論文から）。

は「あたま」、Kは「くび」、Mは「むね」、Sは「しり」である。

4. 拍（モーラ）はシラビームと同じ大きさか、それよりも小さい。つまり1シラビームは1拍か2拍以上から成る。

ところで、この方言では1シラビーム・1拍である。すなわち、この方言では拍という単位は不要である。拍というものは、その前または後にアクセントの高低変化の境目が来うような単位である⁽³⁾。ところが、この方言では/R/、/Q/の前にアクセントの境が来ない。したがって、与那国島方言のシラビームはさらに拍に割れるということがないわけである。

音素が連結する順序はA→K→M→Sであるが、さらに、音素間に連結上の制限がある。与那国島方言では、

1. /e/, /o/ には必ず /R/ が連結する。
2. /N/ には決して /R/, /Q/ は連結しない。
3. /w/, /j/ には決して /N/ は連結しない。
4. /h, ʔ, ʼ/ 以外の子音音素には決して /N/ は連結しない。

これ以外は連結自由であるが、実際に語の部分として含まれるシラビームのうち、/R/, /Q/ を伴うものを除き、さらに、/eR/, /oR/ については /R/ をとり去ったものの一覧表を作ると、次のようになる。なお、東京方言のように、これを拍の体系とはいえない。

'wa	'u	—	'a	'e	'i	'ju	—	'ja	'ji	'N
?wa	?u	—	?a	?e	?i	—	—	?ja	?ji	?N
—	hu	—	ha	he	hi	hju	hjo	hja	—	—
—	ɲu	—	ɲa	ɲe	ɲi	ɲju	ɲjo	—	—	—
gwa	gu	go	ga	ge	gi	gju	gjo	—	—	—
kqwa	kqu	kqo	kqa	kqe	kqi	kqju	—	kqja	—	—
kwa	ku	ko	ka	—	ki	—	—	—	—	—
—	su	so	sa	se	si	sju	sjo	sja	—	—
—	ru	—	ra	re	ri	—	rjo	rja	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	zja	—	—
—	cqu	—	cqa	—	cqi	cqju	cqjo	cqja	—	—
—	cu	—	ca	—	ci	cju	cjo	cja	—	—
—	nu	—	na	ne	ni	—	—	—	—	—
—	du	do	da	de	di	—	—	dja	—	—

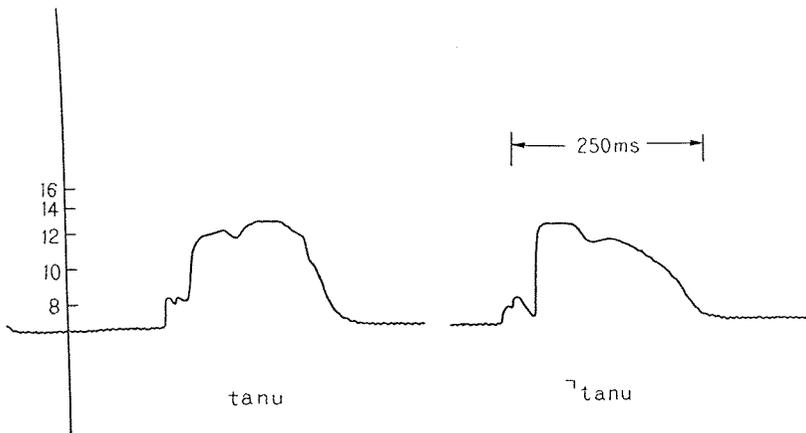
tqu	tqo	tqa	tqe	tqi	—	—	—
tu	—	ta	—	ti	—	—	—
mu	—	ma	—	mi	—	—	mja
bu	—	ba	—	bi	bju	—	bja
pqu	—	pqa	—	—	—	—	—
—	—	pa	—	—	—	—	—

なお、シラビームの「あたま」以外にある音素は当然語頭には立ちえないが、そのほかに、語頭に立ちえない(その語例を見つけなかった)子音音素がある。
/ŋ, r, p/ がそれで、さらに、語頭に立つ例のきわめて少ないのをあげれば /g, z, pq/ である⁽⁶⁾。

2.3 アクセント体系

二つの型しかない。1. 平ら調, 2. さがり調。平ら調はアクセント節の末尾までさがることがないのに対して、さがり調はアクセント節の末尾に向かってさがる。

第4図は、平ら調の /tanu/ 「だれの」とさがり調の /^ˈtanu/ 「田の」とを



第4図

(6) そのきわめて少ない例をあげると、/g/ : /guma'N/ 「小さい」、/giQcqi/ 「雇われ人」、/gioR/ 「旧4月1日から9月30日までのカツオ船の勘定期間」(<業)。/z/ : /zjahi/ 「三味線」、/zjaku/ 「カツオつりの餌」。/pq/ : /pqu'ibu'N/ 「(血・乳を)吸う」、/pqa'Nŋa'ji/ 「鋏」、/pqasi/ 「釣」、/pqasabi/ 「ぐずること。駄々」。

(7) 国立国語研究所にあるペン書きビッチレコーダー (日本電子測器株式会社の Pitch & Intensity Recorder. Model P1-1)。

ピッチレコーダー⁽⁷⁾で分析したものである。これによると、前者の/*tanu*/の/*a*/の最も高い部分と/*u*/の最も高い部分とを比べると、あとの方が少し高い。そして、/*u*/の高い部分は急に下降の線をえがいて終るが、この線はアクセントの点で意味がない。ただ、/*tanu*/の/*u*/の下降と比べると、この方はきわめてゆるやかである。試みに、/*u*/の最も高い部分から完全に低くなるまでの時間を測ると、/*tanu*/の/*u*/は125msであるのに/*tanu*/の/*u*/は166.7msかかっている。/*tanu*/の下降はアクセントの点で意味を持つものと見られる。仮に、この語のアクセントを象徴的にえがくと次のようになる。

/*tanu*/



/*tanu*/



第5図は、/*haQcqi*/「橋」と/*haQcqi*/「箸」とを比べたものである。前の例に比べて、いっそう互によく似ているが、/*i*/の最も高い部分から完全に低くなるまでの時間は、/*haQcqi*/の場合の方が長い（/*haQcqi*/の/*i*/は125ms、/*haQcqi*/の/*i*/は104.2ms）。つまり、/*haQcqi*/のアクセントはくだけり調である。



第5図

長いアクセント節になると、平ら調は最後から数えて第2音節のあたりでややあがることが多く、さがり調は最後から数えて第2音節のあたりで下降が目立つ。

すでに明らかなように、ここでは、くんだり調を /' / で表わし、平ら調は何も符号をつけないでおいた。(必要に応じて /- / を語の初めにつけることが考えられる)。なお、図では /' / の代わりに /˘ / を使った。

3 音韻対応

3.1 母音音素

琉球の首里方言などと違って短母音の1音節自立語がある⁽⁸⁾。

/˘mi/ 目 cf. /miR/ 三

/tqu/ 人

与那国島方言の短母音音素は東京方言の母音音素に次のように対応する。ここでは、琉球の与那嶺(国頭郡今帰仁村字与那嶺)・那覇・首里の諸方言と比べながらあげる⁽⁹⁾。

	与那国	与那嶺	那覇	首里	東京
	a	a	a	a	a
	i	i	i	i	e
	i	i	i	i	i
	i	i	i	i	u (c, z, sのあと)
	u	u	u	u	u (c, z, s以外のあと)
	u	u	u	u	o
花	˘hana	˘panaa	˘hana	hana	hana˘(ga)
目	˘mi	˘mii	˘mii	mii	me˘(ga)
肝	˘cimu	˘cqimu	˘cimu	cimu	kimo˘(ga)
いつ	ʔiQci	˘hicqii	˘ʔici	ʔi˘ʧi	˘i˘cu
砂	cqina˘N	˘sinaa	˘sinaa	ʧi˘na	˘suna˘(ga)
夜	˘duru	˘˘juruu	˘˘juu˘ru	˘˘juru	˘˘jo˘ru
星	˘huQcqi	˘pusii	˘husi	hu˘si	˘hosi(ga)

(8) 『世界言語概説下巻』中の「琉球語」(服部四郎氏執筆)。p.325

(9) 琉球諸方言は服部四郎「沖縄方言の言語年代学的研究」『民族学研究 IXI—2』から引用した。ただし、与那嶺方言の喉頭化無気音音素は与那国方言のそれに合わせて表記を変えた。それ以外は、そのまま引用した。

3.2 子音音素

語頭の喉頭化子音音素は東京方言の C_1VC_2 に対応するものが多い。ただし C_1 は無声子音音素, V は /a/ 以外の母音音素, C_2 は無声子音音素および /r/ とする。そして, C_2 が /k/ のとき /kq/, /t/ および /c/ のとき /tq/, /s/ および /r/ のとき /cq/ である。

	与那国	与那嶺	那覇	首里	東京
吹く	\kqu'N	┘pucquN	┘hucuN	hucuN	hu`ku
ふくれる	kquriru'N	┘puQkqi`N	┘huQkwiiN	hu`QkwijuN	hukureru
ほこり	\kqu?N	┘pukqui	┘hukui	hu`kui	hokori
乾いた	kqaratu'N	┘haaracui`nu	┘kaaracooru	ka`aracooru	hikarabita
聞く	kqu'N	┘hicquN	┘cicuN	ci`cuN	kiku
敷く	kqu'N	┘sicquN		si`cuN	siku
牛が角を 突く	kqu'N	┘sicquN		çi`cuN	cuku
下へ	tqara'Nkqi	┘hicaa	si`caNkai	┘sicaNkai	sita'e
口	tqibuni	┘kucqii	┘kuci	ku`ci	kuci
		cf. buni は「骨」か。なお, 「背中」は kuQcqibuni という。			
人	tqu	┘cquu	┘Qcu	Q`cu	hito` (ga)
一の	\tquQci	┘tqiici	tii`ci	tiiçi	hito`cu
二つ	tqaQci	┘tqaa`cqi	┘taaci	ta`açi	hutaQcu` (ga)
草	cqa	┘kusaa	┘kusa	kusa	kusa` (ga)
腐った	\cqaRri	kquQ`cquinu	kusari`tooru	kuQcooru	kusa`Qta
昼間	\cquR	┘pqiruu	┘hiru	hwi`ru	hiru` (ga)
知る (知ってる)	cqu'N	┘siQcqu`N	┘ciQcooN	siQcooN	siru
白い (白くなる)	cquraribu'N	┘siruse`N	siru`saN	sirusaN	siro`i
しらみ	\cqa?N	┘siraa`mi	sira`N	siraN	sirami
切る	\cqu'N	┘ciN	┘ciiN	icjuN	ki`ru

以上のほかに,

月	\tqi	┘hicquu	┘cici	çici	cuki` (ga)
	cf. <*kqi	<tuki			
近い	\tpa?N	┘hicaase`N	cica`saN	cicasaN	cika`i
	cf. <*kqa-	<tika-			

のように, kq- からさらに tq- へ変化したと見られるものもある。

なお, /cq(i)/ には /s(i, u)/ に対応するものがある。

粟	'cqi	「sii		ʃii	su ⁽⁷⁾ (ga)
砂	cqina'N	「sinaa	「sina	ʃi ⁷ na	suna
生肉	'cqicqi	└sii	└sisi	sisi	sisi ⁷ oki<文>

cf. 与那国島では豚肉のこと。

汁	'cqiru			siru	si ⁷ ru
煤	'cqiQcqi			ʃiiʃii	su ⁷ su

なお、次の語は対応関係ははっきりつかめない。

こする	'cqiQcqu'N	└siN	└siiN	sijuN	kosuru
胸	cqimuti	(「nii)	(└Nni)	(⁷ Nni)	(mune ⁷ (ga))

次に、語頭の /⁷N/, /[?]N/ は東京方言の N₁VN₂ に対応するものが多い。ただし、N₁, N₂ のうち少なくとも一方が鼻子音音素か、N₂ が /b/, /d/, /g/ のいずれかであり、V が /a/ 以外の母音音素であるとする。

爪	'Nmi	「cimii	「cimi	ʃi ⁷ mi	cume
角	'?Nnu'N	└cqinuu	└cinu	ʃinu	cuno ⁷ (ga)
綱	'Nna	└cqinaa	└cina	ʃina	cuna ⁷ (ga)
死ぬ	'Nniru'N	「sinuN	「sinuN	si ⁷ nuN	sinu

cf. 熊本・鹿児島方言 tineru 「眠る」、宮崎県都城方言 tiniru 「眠る」に直接対応する可能性がある。

昨日	?Nnu	「kinuu		cinuu	kino ⁷ R
着物	'Nnani	└cinuu	└ciN	ciN	ki ⁷ nu<文>
昔	'Nkacqi	「mukqaasi		'Nkasi	mukasi
満ちる	'Ntu?N	mi ⁷ i	「mii	mi ⁷ i	mi ⁷ cu<文>
むかで	'?Nkadi	「mukqaazi		'Nkazi	mukade
真中	'Nnaga	(「maN ⁷ nahaa)		(ma ⁷ Nnaka)	mo ⁷ naka<文>
言う	'Ndu'N	「?juN	「?iiN	?ju ⁷ N	'ju'u

cf. <'mudu'N<'mu'N ?ju'N<'munu 「?ju'N

くちびる	'Nba	└subaabi ⁷ ru	—	(ʃiba)	
------	------	--------------------------	---	--------	--

cf. 九州方言 cuba, tuba 「くちびる」。

左	'?Nda'ji	└pqizai	└hiza ⁷ i	hwizai	hidari
太鼓	'Nnu'N			ʃi ⁷ ziN	cuzumi ⁷ (ga) <鼓>

cf. <tudumi

陰囊	'Ngu'i	「pugui		hu _└ gui	hu ⁷ guri
ひげ	?Ngi			hwi ⁷ zi	hige

なお、上のように対応しない（対応するかどうか今のところわからない）も

のに次のようなものがある。

馬	'Nma	┌'maa		?Nma	'uma┐(ga), Nma┐(ga)
どこ	'?Nma	da┐a	┌maa	maa	do┐ko
見る	'Nnu'N	┌mjuN	┌'NNzuN	'NNzuN	mi┐ru
あなた	?Nda	┌'jaa	┌'jaa	?ja┐a	
あなたたち	?Ndi	┌naQtqa┐a		?uNzunaa	
坐ってる	'Ntquru'N	┌'iQcqu┐N	┌'icooN	'i┐cooN	
結ぶ	'Nma'N kuru'N	┌musiibi┐N	┌kuNzuN	mu┐subuN	musubu
濡れた	?Npa'ibu'N	┌diitqui┐nu	┌'Nritooru	'N┐ditooru	
赤坊	'Nkuti				

cf. 宮良当杜「八重山語彙」乙篇p.4 Aka-go: ノコッティー [ɲkott'i:](ノコは赤子の泣く声の形容。ティーは小さき愛らしき者の義)(与那)。

以上のほかの語頭の子音音素については次のような対応が見られる。

与那国	与那嶺	那覇	首里	東京
k-	k-	k-	k-	k-
t-	t-	t-	t-	t-
c-	cq-	c-	c-	c-, k-
c-	s-	s-	s-, s̥-	s-

その例をあげよう。

木	'ki	┌kii	┌kii	kii	ki┐(ga)
搔く	'kagu'N	┌hacquN	┌kacuN	kacuN	ka┐ku
手	'ti	┌tii	┌tii	tii	te┐(ga)
種	'tani	(┌sanii)	(┌sani)	(sa┐ni)	ta┐ne
牛乳	'ci	┌cqii	┌cii	cii	cici
肝	'cimu	┌cqimuu	┌cimu	cimu	kimo┐(ga)
火	'ci	┌pqii	┌hii	hwii	hi┐(ga)

cf. ci < *si < hi

なお,

与那国	与那嶺	那覇	首里	東京
m-	m-	m-	m-	m-
n-	n-	n-	n-	n-

燃える	'mu'iru'N	「muiru'N	「meeiN	me'ejuN	mo'eru
飲む	'numu'N	「numiN	「numuN	nunuN	no'mu

さらに,

	s-	s-	s-	ʃ-	s-
	h-	q-	h-, hw	h-, hw	h-
吸う	'su'N	「sipuuru'N	「siQpuiN	ʃi'pujuN	su'u
花	'hana	└panaa	└hana	hana	hana'└(ga)
引く	'hiQkqu'N	「picquN	「hiQpaiN	hwi'cuN	hiQpa'ru
葉	ha	「paa	「hwaa	hwa'a	ha

最後に,

	d-	'j-	'j-	'j-	'j
	b-	'w-	'w-	'w-	'w-
八つ	'daQci	'jaa'cqi	「jaaci	'ja'açi	'jaQcu'└(ga)
山	'dama	└'jamaa	(「mui)	(mu'i)	'jama'└(ga)
読む	'dumu'N	└'jumiN		'junuN	'jo'mu
悪い	'barasa?N	'waQ'seN	'waQ'saN	'waQsaN	'waru'i
はらわた	'batqa	└'watqaa	└'watamii'muN	'watamiimu'N	hara'wata'└(ga)
主人	'buQtqu	「uQtquu	「'utu	'u'tu	'oQto
	cf. 13世紀京都方言	'wo(Q)to			
踊り	'budi	wudui (アクセント不明)		'u'dui	'odori
	cf. 18世紀東京方言	'wodori			

3.3 アクセント

アクセントの型の対応を首里・穎娃（鹿児島県揖宿郡穎娃町）・京都・東京の諸方言との間に求めてみた。与那国島方言の2シラビーム語が必ずしも東京方言などの2拍語に対応せず、ときに語根を異にすることもあるので、実際に比較しうる語はあまり多くない。

	与那国	首里	穎娃	京都	東京	語類
風	kadi	ka'zi	ka'ze	kaze	kaze	I
虫	muQcqi	mu'si		musi	musi	I
蟻	'a'ja	?a'i		'ari	'ari	I
酒	sagi	sa'ki	sa'ge	sake	sake	I
袖	sudi	su'di	so'de	sode	sode	I
竹	tagi	da'ki	ta'ge	take	take	I

棚	tana	ta ^ˊ na	ta ^ˊ na	tana	tana	I
牛	?uQci	?u ^ˊ si	'u ^ˊ si	'usi	'usi	I
水	mi ^ˊ N	mi ^ˊ zi		mizu	mizu	I
歌	?uQtqa	?u ^ˊ ta	'u ^ˊ da	'u ^ˊ ta	'uta ^ˊ (ga)	II
紙	kabi	ka ^ˊ bi	^ˊ kaN	ka ^ˊ mi	kami ^ˊ (ga)	II
夏	naQcqi	na ^ˊ ci	^ˊ naRQ	na ^ˊ cu	nacu ^ˊ (ga)	II
冬	hu'ju	hu ^ˊ ju	^ˊ huJ	hu ^ˊ ju	hu'ju ^ˊ (ga)	II
石	'iQci	?i ^ˊ si	'i ^ˊ si	'i ^ˊ si	'isi ^ˊ (ga)	II

cf. 与那国島では「田の土を固めるために牛にひかす石」の意。

橋	haQcqi	ha ^ˊ si	ha ^ˊ si	ha ^ˊ si	hasi ^ˊ (ga)	II
花	'hana	hana	hana	ha ^ˊ na	hana ^ˊ (ga)	III
腕	'udi	'udi	(gode)	'u ^ˊ de	'ude ^ˊ (ga)	III
山	'dama	'jama	'jama	'ja ^ˊ ma	'jama ^ˊ (ga)	III
種	'tani	tani	tane	ta ^ˊ ne	ta ^ˊ ne	IV

cf. 首里では「男根」の意。

息	'ziQti	?iici	'iQ	'i ^ˊ ki	'i ^ˊ ki	IV
筍	'haQcqi	haasi	hasi	ha ^ˊ si	ha ^ˊ si	IV
雨	'ami	?ami		'ame ^ˊ R	'a ^ˊ me	V
汗	'asi	?asi	'ase	'ase ^ˊ R	'a ^ˊ se	V

以上によれば次のようになる。

工 地 器 類	与那国	首 里	頭 娃	京 都	東 京
I	—	／	／	—	—
II	—	／	／	／	／
III	—	—	—	／	／
IV	／	—	—	／	／
V	—	—	—	／	／

第 6 図

次に、与那国島方言の 1 シラビーム語については、

	与那国	首里	颯娃	京都	東京	語類
血	ci	ci ^ˈ i	^ˈ ti	cii	ci(ga)	I
葉	ha	hwa ^ˈ a	^ˈ ha	ha ^ˈ a	ha(ga)	II
名	naR	na ^ˈ a	^ˈ na	na ^ˈ a	na(ga)	II
木	^ˈ ki	kii	ki	ki ^ˈ i	ki ^ˈ (ga)	III
田	^ˈ ta	taa	(taNbo)	ta ^ˈ a	ta ^ˈ (ga)	III
手	^ˈ ti	tii	te	te ^ˈ e	te ^ˈ (ga)	III
火	^ˈ ci	hwii	hi	hi ^ˈ i	hi ^ˈ (ga)	III
巢	^ˈ cqi	ɕii	su	suu	su ^(ˈ) (ga)	III

以上によれば次のようになる。

第7図

土地 語類	与那国	首里	颯娃	京都	東京
I	—	／	／	／	—
II	—	／	／	／	—
III	／	—	—	—	／

4 結 び

4.1 この方言の特徴

この方言を東京方言に比べると、1) 一系列の喉頭化子音音素がある、2) /ʼ/ と /ʔ/ との区別がある、3) /e/, /o/ に続く音素に制限がある、4) /g/ と /ŋ/ との区別がある点で積極的に異なり、そして、5) 拍に割れない、6) /J/ がない点で消極的に異なる。

次に、この方言を首里方言に比べると、1) 一系列の喉頭化子音音素がある、2) /g/ と /ŋ/ との区別がある、3) 短母音音素のシラビームがある点で積極的に異なり、そして、4) /Q/ が成節的でない、5) /hw/ がない点で消極的に異なる。

4.2 この方言の古さ

東京方言に比べて、いろいろな点で新しい方言である。母音音素も、喉頭化子音音素も新しい発生であるし、/c/ のあるものも新しい。アクセント体系も型が二つしかないから、やはり新しい。これに対して、古いかもしれない点は、/j/ に対応する /d/、/'w/ に対応する /b/ のあること、シラビームが拍に割れないことである。明らかに古い点は、/kwa, gwa/ のあること、/ti/ と /tu/ および /di/ と /du/ 相互の区別があることである。

首里方言に比べて新しい点は、喉頭化子音音素が発生していること、/hw/ がないことである。これに対して、/j/ に対応する /d/、/'w/ に対応する /b/ のあることは古い点かもしれない。

ここで使った材料は、次の三つの場で行った観察から得ている。①1958年4月上旬森岡健二氏をはじめ水谷静夫・宇野義方・祖父江寛・夜久正雄の諸氏と箱根で3泊4日で行った共同観察 ②4月中旬から6月下旬まで毎週1時間以上、国際基督教大学日本語科の演習で、小出詞子氏をはじめ同大学の学生諸君らと行った観察 ③4月上旬から10月中旬まで、数回にわたって毎回5時間ほど拙宅などでわたしだけで行なった観察。このほか、国立国語研究所で編集集中(上村幸雄氏担当)の首里語辞典、仲宗根政善氏の与那嶺方言ノート(徳川宗賢氏から借用した)から補った。

東京方言との対応については林大氏の助言を得た。ソナグラム・ピッチグラムの分析はもっぱら高田正治氏によるものである。

以上の各氏および被調査者の外間守之氏にここで深く感謝の意を表します。

付記 再校を終った段階で、上村幸雄氏の注意により、アクセントの型にもう一つ区別すべきものがあることを確かめた。それは、ここで「さがり調」として記したもののうちに含まれている。新しい第3の型も、さがり調と同様、最後でさがるけれども、さがり調が最初を高く始めるのに対し、第3の型は低く始める。その点で区別される。2シラビーム(拍)語の第Ⅲ類はこの第3の型で、第Ⅳ・Ⅴ類と区別される。したがって、たとえば、'udi(腕)とtani(種)とは型が異なる。